

2024年10月3日

プレスリリース

EU 加盟国の批評家 8 人が来日、 オープニング・シンポジウムに津田大介登壇

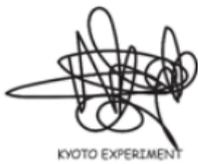
「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」

キックオフ記念し、10月8日に開催。期間中、パネル・トークの他、ポッドキャストも配信予定。



駐日欧州連合（EU）代表部は10月8日夜、京都市内で、「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」のオープニング・シンポジウムを開催します。「KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2024」（会期：10月5日～27日）の開催に合わせ今回初めて実施されるこのレジデンスは、文化芸術の批評の今後の可能性を模索するプログラムです。オープニング・シンポジウムでは、欧州と日本におけるジャーナリズムと批評の現在地をテーマとして取り上げます。

シンポジウム第1部では、日本と海外におけるメディアを取り巻く環境の変化について批評的に考察しながら、独立したジャーナリズムのプラットフォームを構築してきたことで広く知られているジャーナリスト兼メディア・アクティビストの津田大介が登壇。基調講演で津田は、日本におけるジャーナリズムと批評の現状、また表現の自由と過激化する言論について自らの視点を共有します。第2部では、津田と、今回来日する8人のEU加盟国出身の批評家たちとの議論の場を設けます。8人のレジデントは、欧州の異なる文化圏の多様な背景から各国の社会状況に踏まえ批評の課題に対して自らのアプローチを共有します。



「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」は、EU 代表部が主催、ゲーテ・インスティトゥート東京が運営し、KYOTO EXPERIMENT、公益財団法人セゾン文化財団の協力の下で行われます。100 人を超える EU 加盟国の応募者の中から選ばれた 8 人の批評家は、本レジデンスにおいて、それぞれの専門知識や経験を共有し、アートや文化政策の環境を育む批評と、現代社会における文化とアートの役割について共に考察します。オープニング・シンポジウムの他にも、セゾン文化財団が選出した日本の批評家と対話するパネル・トーク、クロージング・シンポジウムなどが行われる予定です。

日本では現在、文化批評や芸術批評に焦点を当てた国際的なレジデンスが行われていない現状を踏まえ、「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」は、批評の現在と今後を追求していく試みになるでしょう。近年、SNS の勢いが増し、デジタル空間の可能性を活かした表現活動が増えている一方、これまで批評の中心的なプラットフォームとなっていた新聞や雑誌といった紙媒体が一部存続の危機にさらされています。そのような中で、文化や芸術の批評がどのような状況に置かれ、どのような可能性を開くことができるかを議論することは重要です。

「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」オープニング・シンポジウム

タイトル：「ジャーナリズムと批評の現在地」

日時：10月8日（火）19:00～21:30

会場：京都芸術センター フリースペース（〒604-8156 京都府京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町5 4 6-2）

言語：日本語・英語（同時通訳付）

登壇者・出演者（順不同）：津田大介、EU 加盟国の批評家 8 人

主催：駐日欧州連合代表部

協力：KYOTO EXPERIMENT、公益財団法人セゾン文化財団

レジデンス協力：京都芸術センター

運営：ゲーテ・インスティトゥート東京

定員：70 名

入場無料

会場でご参加される方は下記リンク又は QR コードよりご予約をお願い致します：

<https://criticinresidence2024-01.peatix.com/>



※オープニング・シンポジウムは KYOTO EXPERIMENT の YouTube チャンネルにてライブ配信を行います。

「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」スケジュール

オープニング・シンポジウムに続き、レジデントが各テーマに沿って議論するパネルトークを計 3 回、そしてクロージング・シンポジウムを行います。また、KYOTO EXPERIMENT 2024 の上演作品について語る Podcast シリーズの配信も予定しています。

イベント	日時	タイトル	会場	登壇者
オープニング・シンポジウム	10月8日 (火) 19:00 ～21:30	ジャーナリズムと批評の 現在地	京都芸術センター フリースペース (定員： 70名)	津田大介、 EU加盟国の批評家8人
パネルトーク1	10月13日 (日) 11:00 ～13:00	変容するメディア／変容 する批評 (ソーシャルメ ディアとの関わり)	京都芸術センター 制作室6 (定員：20 名)	EU加盟国の批評家数人、 日本の批評家
パネルトーク2	10月20日 (日) 11:00 ～13:00	(複数の) 分断の時代 (右傾化、ポリティカルコ レクトネス、舞台をめぐる 労働環境)	京都芸術センター ミーティングルーム2 (定 員：20名)	EU加盟国の批評家数人、 日本の批評家
パネルトーク3	10月23日 (水) 18:30 ～20:30	ローカルヒストリー、脱中 心化 (周縁性)	京都芸術センター ミーティングルーム2 (定 員：20名)	EU加盟国の批評家数人
クロージング・シンポジウム	10月26日 (土) 11:00 ～13:00 (予 定)	レジデントが企画予定	京都芸術センター フリースペース (定員： 70名)	EU加盟国の批評家8人

オープニング・シンポジウム以外のイベントに関しては、言語は日本語・英語 (逐次通訳付)、入場無料、事前申込不要

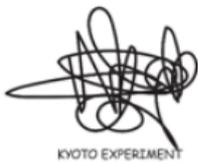
「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」に参加する批評家およびイベント登壇者のプロフィール

■ 津田大介 / Daisuke Tsuda (オープニング・シンポジウム登壇者)



ジャーナリスト／メディア・アクティビスト。ポリタス編集長／ポリタス TV キャスター。1973 年生まれ。東京都出身。早稲田大学社会科学部卒。メディアとジャーナリズム、テクノロジーと社会、表現の自由とネット上の人権侵害、地域課題解決と行政の文化事業、著作権とコンテンツビジネスなどを専門分野として執筆・取材活動を行う。主な著書に『情報戦争を生き抜く』(朝日新書)、『ウェブで政治を動かす!』(朝日新書)、『動員の革命』(中公新書ラクレ)、『情報の呼吸法』(朝日出版社)、『Twitter 社会論』(洋泉社新書) ほか。2011 年

9 月より週刊有料メールマガジン「メディアの現場」を配信中。



レジデンスに参加する EU 加盟国の批評家

(アルファベット順)

■ ルカ・ドメニコ・アルトウーゾ / Luca Domenico Artuso (イタリア/ベルギー)



ベルギーのアントワープ大学で演劇とインターメディアを専門とする、イタリアの博士号研究者。研究対象は、フェミニストやクィアの視点による能の解釈を中心に、日本の現代パフォーマンスにまで及んでいる。2024 年以降、舞台芸術批評が、ベルギーの演劇と現代パフォーマンスの専門誌『Etcetera』に掲載されている。また、2019 年から 2023 年まで国際交流基金のローマ日本文化会館図書館で専門司書を務めた。2018 年には、イタリアと日本の異文化交流の新拠点として、ヴェネチア大学で日本学を研究する学生団体「Gesshin」を設立。国際パフォーマンス研究学会 (Psi: Performance Studies International) 所属。

■ ローラ・カベル / Laura Cappelle (フランス)



フランスのアートライター、社会学者、ダンス研究者。2010 年から英フィナンシャル・タイムズでパリ在住ダンス批評家として執筆し、2017 年から米ニューヨーク・タイムズにフランスの舞台芸術や文化特集について継続的に寄稿している。また、フランス国立ダンスセンターが発行するバイリンガル誌『CND Magazine』の編集コンサルタントや、ヨーロッパの新進気鋭のダンス批評家のためのプログラム Springback Academy のメンターを務める。2023 年にソルボンヌ・ヌーヴェル大学 (旧パリ第 3 大学) の准教授に就任。受賞した編書にフランス語によるダンス史入門書『Nouvelle Histoire de la danse en Occident』(スイコ出版社、2020 年)、またその書籍をグラフィックノベルとして翻案した共著 (同社、2024 年) がある。『Créer des ballets au XXIe siècle』(CNRS Éditions、2024 年) の著者であり、2022 年より the CCN-Ballet de l'Opéra national du Rhin の客員研究員でもある。

写真: Jérôme Panconi

■ フレダ・フィアラ / Freda Fiala (オーストリア)



舞台芸術研究者、キュレーター。オーストリア科学アカデミーのフェローであり、演劇・映画とメディア学、中国学をウィーン、ベルリン、香港、台北で学ぶ。東アジアのパフォーマンス文化と異文化関係に焦点を当てている。また、オーストリアの OK in Linz で開催されたパフォーマンスフェスティバル「The Non-fungible Body?」と、「HYBRID BODIES」をキュレーション。ウィーン美術アカデミー、ウィーン大学でパフォーマンス理論を教え、DISTANZ Verlag、PAJ / MIT Press、台北市立美術館、台北パフォーミングアーツセンター等から出版している。

■ タマシュ・ヤーサイ / Tamás Jászay (ハンガリー)



2003 年から演劇批評を執筆。「長年一つのスタイルや美学を選ばず、演劇に関連するもの全てを理解し、感じようとしていたが、年月が経つにつれ批評家としての立ち位置は単純かつ複雑なものになった」としている。2000 年代のハンガリーのインディペンデント系演劇ブームを受け、インディペンデント系演劇集団に興味を持つ。一方で、「演劇史の専門家として、1970 年代と 1980 年代の様式を試みるクリエイターとの対話は最後の機会になった」との認識も示している。

また、キュレーターおよびフェスティバルのセクターとして、革新的で実験的な試みの表現にも密接に関わってきた。レジデンスプログラムへの参加は、欧州とは全く異なる演劇文化に触れられる機会となると考えているという。写真: Vera Éder

■ マイケル・ラニガン / Michael Lanigan (アイルランド)



『Dublin Inquirer』の文化芸術担当記者。ダブリンの視覚芸術と舞台芸術のシーンに焦点を当て、政府の政策がダブリン市の文化と伝統にどのような影響を与えているのかを調査している。現在、ダン・レアリー＝ラスダウン市の Lexicon Library におけるアーティストへのインタビューシリーズ「Walk and Talk」をホストしている。また、執筆記事は、『Vice』、『The Guardian』、『The Irish Times』、『Tokyo Weekender』、『Metropolis』、『The Business Post』、『Huck』、『Totally Dublin』等の媒体に掲載されている。ダブリンとキルケニーの中間地点に在住。

■ サンタ・レメール / Santa Remere (ラトビア)

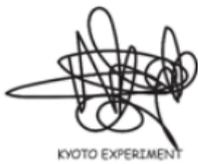


New Theatre Institute of Latvia (NTIL) の新芸術監督であり、国際舞台芸術フェスティバル「Homo Novus」のキュレーターを務めている。早稲田大学、多摩美術大学でビジュアルコミュニケーションを学んだ背景を持つ。2011 年から、ラトビアおよびバルト諸国の様々な出版物に、主に若年層の観客の文化、現代演劇、フェミニストのトピック等に焦点を当てた芸術批評を定期的に寄稿している。ラトビアのオンラインカルチャーマガジン『satori.lv』の編集者の一人でもある。

■ アイステ・シヴィテ / Aistė Šivytė (リトアニア)



リトアニアのヴァリニユスを拠点とする舞台芸術批評家。直近 5 年間、フリーランスとして活動し、演劇やダンス、現代サーカス、ストリートでの舞台パフォーマンスに関する批評とインタビューを 70 本以上執筆、様々なカルチャーマガジンや新聞、インターネットメディアに掲載されている。



■ イリнка=タマラ・トドルツ / Ilinca-Tamara Todoruț (ルーマニア)

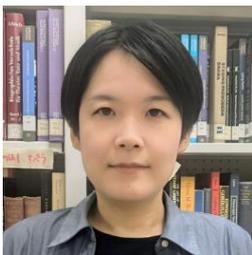


ルーマニアを拠点とする演劇評論家、学者、ドラマトゥルク、翻訳者。イェール演劇学校で博士号を取得し、現在はバベシユ・ボヨイ大学の演劇映画学部で教鞭を執る。執筆記事は、『Theatre』、『TDR: The Drama Review』、『Performance Research』、『Journal of Poverty』、『European Stages』、『Theater History Studies』などの専門誌に掲載されている。また、『The Routledge Companion to Dramaturgy』に寄稿し、著書に『Christoph Schlingensiefel's Realist Theater』(Routledge、2022年)がある。

Scena.ro や TheTheatreTimes.com などの演劇媒体と定期的に協働しており、2023年の「International Online Theatre Festival (IOTF) 2023」の芸術監督も務めた。

レジデンスに参加する日本の批評家

■ 伊藤寧美 / Nabi Ito



1988年、兵庫県出身。2014年、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。2023年、バーミンガム大学大学院博士課程修了。2024年4月より大阪大学人文学研究科芸術学専攻演劇学コース講師。専門は現代英国演劇、特に戯曲分析を中心に研究を行う。現在は、戯曲とその上演におけるマイノリティの表象に注目し研究を進めている。批評家としては主に現代演劇、パフォーマンス作品を取り上げ、『紙背』、『シアターアーツ』などの媒体で劇評を発表している。

■ 山崎健太 / Kenta Yamazaki



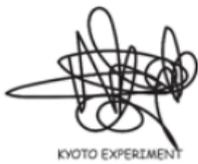
1983年生まれ。批評家、ドラマトゥルク。演劇批評誌『紙背』編集長。WEBマガジン artscape でショートレビューを連載。ほかに「現代日本演劇のSF的諸相」(『S-Fマガジン』、早川書房、2014年2月～2017年2月)など。2019年からは演出家・俳優の橋本清とともに y/n として舞台作品を発表。これまでの作品に『カミングアウトレッスン』(2020)、『フロム高円寺、愛知、ブラジル』(2023)などがある。

写真: Yamahata Takuya

レジデンスの日本側ファシリテーター

■ 池田 剛介

美術作家、作品分析。1980年福岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。人間をとりまく物質やエネルギーの存在への関心を軸に、絵画やインスタレーションなど表現形式を横断しながら制作を行う。また並行して、批評誌やウェブ媒体での執筆活動に取り組んでいる。2019年より京都にてアートスペース「浄土複合」をディレクション。著書に『失われたモノを求めて——不確かさの時代と芸術』(夕書房、2019年)。



■ 古後 奈緒子

1990年代から関西とドイツ文化圏を行き来して、ダンス、パフォーマンスの通訳翻訳、記録、批評などを行ってきた。現在は大阪大学人文学研究科アート・メディア論コースで、100年以上前の舞台舞踊を、電気技術、複製技術、労働、ジェンダーなどの観点から研究している。また、メディア環境と身体の関係に関心を寄せながら、現代の舞台芸術、とりわけ非西洋圏のダンサーが様々なメディアで舞踊史／物語を書き換える試みにも注目している。

批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024 について

開催期間：10月5日（土）～27日（日）

主催：駐日欧州連合代表部

協力：KYOTO EXPERIMENT、公益財団法人セゾン文化財団

運営：ゲーテ・インスティテュート東京

詳細はこちらをご覧ください。 <https://kyoto-ex.jp/related/critics-in-residence/>

「KYOTO EXPERIMENT」について <https://kyoto-ex.jp/>

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭は、2010年より京都市内で毎年開催している国際舞台芸術祭。国内外の先鋭的なアーティストを迎え、演劇やダンス、音楽、美術などのジャンルを越境した実験的な舞台芸術をプロデュース・上演し、社会における新たな対話と価値の創造を目指しています。

「公益財団法人セゾン文化財団」について <https://www.saison.or.jp/>

公益財団法人セゾン文化財団は、堤清二氏（1927-2013）の私財によって設立された助成型財団です。1987年より日本の現代演劇・舞踊の振興、およびその国際交流の促進に寄与するため、助成活動を行っています。

駐日 EU 代表部について https://www.eeas.europa.eu/delegations/japan_ja?s=169

（特命全権大使：ジャン＝エリック・パケ、東京都港区）1974年に設置された、日本においてEUを代表する外交機関。EU27加盟国の連携を図り、欧州の多様な歴史や文化を日本に紹介し、外交や貿易・投資、気候・エネルギー、デジタル技術および研究・イノベーションなどの分野において日・EU関係を促進する上で中心的な役割を果たしています。

報道関係者お問い合わせ先

クレアブ株式会社 高橋茜

eu_cult_diplomacy@kreab.com

「批評家・イン・レジデンス@KYOTO EXPERIMENT 2024」 に関するお問い合わせ先

レジデンス・コーディネーター 平野春菜

hina.hirn@gmail.com